

**倉橋惣三の幼児教育論の原思想：
『子供讃歌』におけるキリスト教的児童観を手掛かりに**

安 部 日 珠 沙

**A Consideration to Souzou Kurahashi's Fundamental Thinking:
From the Perspective of his Christian View of Children Through
of the Rereading "Child Hymn"**

Kazusa ABE

要 旨

本稿は、倉橋惣三『子供讃歌』の分析を通して、倉橋の幼児教育思想を根本的に考察し直すために、彼の原思想について探究したものである。倉橋の幼児教育思想の形成に多大な影響を与えた思想家として挙げられる、イエス、ペスタロッチ、フレーベルの諸思想を、彼自身がどのような観点から解釈しようとしていたのかを検討した。倉橋は、彼らを「子供讃歌」の優れた歌い手として捉え、彼らの思想を非セクト的・非ドグマ的に見るとともに、彼らの思想にではなく、彼らそのものにまぎらず以って迫ろうとしていた。倉橋が彼らにあやかろうとした所以は、子どもに対する彼らの心持ちを彼らの諸思想の根本に位置する思想（原思想）として把握し、子どもに対する彼らの深遠な慈育の精神に感服したところにある。倉橋の幼児教育思想の根幹には、彼らの児童観への根本考察が存在するのであって、私たちはこのことを踏まえた上で彼の幼児教育思想を再考しなければならない。

キーワード：根本考察、子供讃歌、キリスト教的児童観、久遠の新

I. はじめに

1. 問題提起

現代の我が国の幼児教育の在り方を考察するとき、第一に顧みられるべきは、倉橋惣三の幼児教育論だろう。現在の我が国の幼児教育は、理念的にも制度的にも、彼の思想を基盤とするところが多くあるからである。他方、津守は、倉橋の没後10年の時点で、倉橋の幼児教育論が未だ結実されることなく、同じ問題を繰り返し提出しながら、現代に持ち越されていることを批判している¹⁾。現在の保育者養成課程において、学生は確実に倉橋の名前や思想に触れるものだが、戦後幼児教育の主導者とも言うべき彼の幼児教育思想は、果たして、現今の幼児教育界にどれだけ正しく理解された上で受け入れられているだろうか。津守の示唆は、彼らの後継である私たちの常なる課題でもある。

しかし倉橋の幼児教育論の真意を探るとはどういうことだろうか。私たちはこれを倉橋自身の言葉から窺い知りえる。「根本考察が足りない。根本考察が足りないから、問題がいつまでも枝葉のところで動いている。かなりいろいろのことが考えられ、試みられ、部分的に究明されるにもかかわらず、意極の決定はいつまでも残されている」²⁾。当時の幼児教育界に対する倉橋の批判的提言は、

しかし同時に、物事の分析と検討における確信をついたものでもある。金子が「倉橋の理論と実践は、常に本質を問おうとし、常に根本的な検討と批判を自他に投げ掛けていた」³⁾と分析するように、倉橋の思想的見地は、常に物事の原理へと目を向けようとする「根本考察」にあった。倉橋の思想が根本考察に基づくということは、畢竟、根本考察こそが彼の思想展開の手法であるに他ならないということになる。

さて、倉橋の思想が根本考察によるものならば、私たちは彼の「根本」が如何なるものであるかを「考察」していかなければならない。倉橋の幼児教育論はしばしば「誘導保育論」として捉えられているが、根本考察という見地から顧みれば、彼の誘導保育論の根本となる思想こそ探究されるべきである。誘導保育論は、倉橋が自らの教育理論の研鑽と教育実践の蓄積を踏まえて、最終的に導出した体系であって、彼自身の言葉を借りれば「枝葉」であり、或いはその先端に結実した果実であり、決して根本に座するものではない。逆説的には、私たちが倉橋の幼児教育論を未だ本当に理解することも結実することもできない所以は、まさに「根本考察が足りない」からではないだろうか。

2. 目的・方法

本稿では、以上のことを踏まえた、倉橋の幼児教育論の原思想の分析と検討を目的とする。戦後の我が国の幼児教育論の原論を形成した倉橋が、自らの思想を体系的に形成する以前に持ちえた思想的な基盤を振り返ることで、彼の思想を本質的に究明するための手掛かりとしたい。

私たちはそのひとつの試みとして、倉橋の自叙伝『子供讃歌』⁴⁾に見られる、彼の日常的な言葉と考え方に注目していくこととする。如何なる公的で学術的な思想も、各々の思想家の私的で非学術的な視点や経験から始まって、次第に客観性を帯びつつ形成されてくるとすれば、倉橋が日々の生活の中で大切にしていた物事の捉え方や表し方こそが、彼の体系の原思想であり、まさに「根本」と言うべきものである。したがって本稿では、倉橋の『子供讃歌』の内容をもとに、彼の原思想を構成しているイエス、ペスタロッチ、フレーベルの言説について、彼がどのような観点からそれらを解釈し、かつ、思想的に習得していったのかを探究していくこととする。

II. キリスト者としての倉橋惣三

1. 倉橋の思想形成の端緒

決して周知のことではないが、倉橋はキリスト者である。もちろんこれは、倉橋がクリスチャンであったということではなく、彼の根本思想にはキリスト教的要素が見出されるということ、しかして彼の思想形成そのものがキリスト教思想からの影響を受けながら行われていたこと、終生その影響を受け続けていたということである⁵⁾。1900年に旧制第一高等学校へ進学したとき、倉橋は内村鑑三と出会った。倉橋は内村を通じて「成功とか功名とかのほかに人生があること」を学んだとし、彼を「精神の師」と仰いで尊敬したと言う(19頁)。しかして学生時代の倉橋は「内村鑑三の聖書研究会の会員となり、キリスト教の精神を学ぶ青年」であり、友人たちと「日曜日には揃って柏木の内村鑑三先生の許へ聖書研究に通っていた」(35頁)。倉橋は「熱心に、キリスト教の求道者の道を歩んでいた」⁶⁾ものの、「信徒になりきれないで悩んで」⁷⁾いたとされているが、彼の具体的な思想形成がキリスト教思想の研究から始まったという事実は、彼の思想を根本から分析・検討する上で注視されるべきことである。

倉橋は、内村が創刊した雑誌『聖書之研究』にも多くの文章を寄せているが、「児童研究が進む

につれて子どもに関連したものが多く⁸⁾ なっていったということからも、彼の児童観がキリスト教思想とともに培われていったことは間違いがない。畢竟、倉橋の保育論および児童観の形成は「白線帽の青年」(14頁)や「角帽生の子ども遍歴」(23頁)のみならず、内村の影響における聖書研究とも並行して進展していったのであって、彼のこのような学術的活動は、東京女子高等師範学校への赴任と第一子の誕生に至るまで続けられた。

2. 児童観の変化とキリスト教的児童観

就職を契機として、倉橋は次第に聖書研究から遠ざかり、『聖書之研究』への執筆も見られなくなった。当時の倉橋の思想的変遷について、森上は「惣三が内村鑑三という人(こころ)を介してキリスト教の思想に影響を受けながらも、それはあくまで頭で理解していた理屈であって、真の信仰を獲得するには至っていなかった⁹⁾ ためだったと分析している。「真の信仰を獲得するには至っていなかった」という点において、倉橋は、キリスト教の信者であったというよりは、むしろイエスの共感者であったと解釈しえる。キリスト教思想が倉橋の思想形成の中心的な一部分になったのは確かだが、彼の思想の要訣が、宗教観にではなく、常に児童観にあったのも事実である。後述するように、倉橋の「子供讃歌」において、イエスは子どもへの卓越した慈愛を力強く唱える、偉大な先達であった。倉橋にとってのイエスとは、信仰の対象としてではなく、自らの保育的模範の対象として位置付けられるべき人物である。

森上はまた、青年期の倉橋の思想的転換の契機として、就職と結婚に伴う「我が子の誕生」を指摘する。実際に、倉橋自身が「彼の児童観が、親になると共に変わってきたことは著しい」(91頁)ことや「対象観的な距離を挟んでの児童観以外の渾一的児童観を体得したのは我が子のお陰である」(92頁)ことを認めている。「我が子の誕生」が、児童観の変化と拡大という思想的変革と、独自の思想形成の端緒を倉橋にもたらしたのである。だが、倉橋の原思想の中にキリスト教的な要素は残り続け、彼の幼児教育論にも影響を与え続けたことは確かである。倉橋は「数限りない子供讃歌の中でも、彼にとって最も絶対の歌は、正直なところ我が子への讃歌である」(84頁)と説き、謙遜と断りをもって「彼の我が子讃歌は、ベツヘレムの星を仰いで集った東方のひじりたちの頌歌を真似るものではもとよりない」(85頁)と論じている。即ち、倉橋は「我が子の誕生」において、敢えて「ベツヘレムの星」というキリスト教的なものを引きながら、平生讃歌としての「子供讃歌」を呈しているのである。自らの思想的転換点ともなった「我が子の誕生」さえ、倉橋はキリスト教的な要素を交えて「我が子」への思いを表現したという事実において、私たちは彼にとってキリスト教思想が身近なものであったことを認めなければならない。

III. 『子供讃歌』における「聖書の文」

1. 倉橋における解釈の仕方

「天国におけるものはかくの如き者なり」は、「子どもを愛することの足りないのを自ら戒める前に、子どもを真にとようとぶ心の浅いのをいつも恥とする」(217頁)という、倉橋自身の自戒と反省の言葉で結ばれている¹⁰⁾。即ち、「聖經の一句」(同頁)に描かれた「子どもを愛すること」および「子どもを真にとようとぶ心」と、自身の子どもへの心持ちとを比較したとき、倉橋は自らの至らなさを戒め、悔やみ、恥じずにはいられなかったと言うのである。しかし一方で、倉橋のこのような自戒と反省は、「聖書の文」(216頁)における、イエスの子どもへの深い愛の中に、倉橋がひとつの究極的な「子供讃歌」を見出していたからではないだろうか。翻って考えれば、『子供讃歌』

そのものが「天国におけるものはかくの如き者なり」という「聖經の一句」によって締め括られていること自体、倉橋がイエスの「子供讃歌」に非常な共感と理解とを寄せ、幼児教育におけるひとつの理想を見ていたことの証左とも言えよう。故に、「聖書の文」への考察なくして、倉橋の児童観や幼児教育論の本意を汲み取ることは不可能である。本章では、倉橋が引いた「聖書の文」¹¹⁾の内容を分析し、「彼の心にありありとする」(216頁) ところのものを探究していくこととする。

2. 「子どもの祝福」

倉橋が「天国におけるものはかくの如き者なり」の中で最初に引用した「聖書の文」は、共観福音書では「子どもの祝福」と題されるものである。「あるとき人々、イエスに、手を按けて祈らんことをねがひ、おさなごを彼につれ来りければ、弟子達これをとどめたり。イエス曰ひけるは、おさなごをゆるせ、我に来ることをとどむる勿れ。天国におけるものは斯くの如き者なり。即ち彼等に手を按けてここを去りぬ」(同頁)。倉橋はこの章句をして、「ペスタロッチの言葉(子どもに学べよ)の源」、「フレーベルの言葉(いざ、子どもらと共に生きん)の初め」、「子どもを愛するものの心のすべての生命」と評し(同頁)、あらゆる「子供讃歌」の原点として捉えている¹²⁾。倉橋は、子どもの来訪を喜んで迎えようとするイエスの姿をして、自らもそれにあやかろうとしていたことは想像に難くない。倉橋にとって「おさなごをゆるせ、我に来ることをとどむること勿れ」という言葉は、あとに続くキリスト教的救済の奥義の前哨であるよりも、端的に「子どもらに対する基督の愛情」(192頁)から出たものであった¹³⁾。また、聖書解釈に見られる象徴的で超常的な言説であるよりは、イエスというひとりの人間の「日常平凡な心の声」にして「折角邑人の連れてきた可愛い子どもたちを、つれなくも追い遠ざけようとする、弟子たちの無常に怒を含みて、子どもと呼ばれた声」であった¹⁴⁾。弟子たちの振る舞いを叱責するイエスに強く共感する倉橋にとっては、自分を求めてやってくる「子どもたちを、つれなくも追い遠ざけようとする」ことは、人間として咎められるべきことだったのである。

しかして「おさなごをゆるせ、我に来ることをとどむること勿れ」、「おさなごを我に来らせよ」という金言は、倉橋が「私も我等相応のころ以て、此の言葉の所有者でありたい」¹⁵⁾とするところのものだった。「子どもたちを、つれなくも追い遠ざけようとする」イエスの弟子たちをして、倉橋は彼らを反面教師的に捉えつつ自戒を込めながら、次のように述べてもいる。

「心も体も疲れている時もあるが仮に如何なる時でも、弟子たちのようなつれないそぶりは子どもに見せたくないと思う。あらい応答を子どもに与えたくないように思う。縋る子どもに若し我が両手を与え得ないならば、片手なりとも優しく与えてやりたいと思う。若し其の片手も与え得ないならば、一語たりとも親しい言葉を与えてやりたいと思う。なお其の一語も与え得ぬ時ならば、せめて和やかな笑顔だけは必ず与えてやりたいと思う。それが何程我等の用務を防げようぞ。我等の時間を奪うであろうぞ、ただ一寸した心柄一つに、我もやさしくいうことができる。『子どもを我に来らしめよ』と。しかも、此の笑顔が一番むつかしいのである」¹⁶⁾。

「子どもの祝福」という「聖經の一句」から掲げられた「子供讃歌」は、畢竟、イエスの子どもへの「愛と慈しみ」(cf. 216頁)にならったものであるのみならず、どのようなときでも「子どもの友だち」(124頁)であろうとする倉橋の本願において綴られたものに他ならない¹⁷⁾。「おさなごをゆるせ、我に来ることをとどむる勿れ」という箴言の内に、倉橋は自らの幼児教育者としての在り方の極致

を見出すとともに、ひとりの「子どもの友だち」としての万感を言い表そうとしたのである。とくに、自らが「あなたの教育精神には万腔の尊敬と礼賛を捧げる」（同頁）としたところのフレーベルを、倉橋が「歴史の上で、最もよく基督の此の言葉を所有した」¹⁸⁾ ところの「子どもの友だち」と評価しているという事実は、端的にこれを証明するものである。

3. 「小さいものたち」

次に挙げられた「聖書の文」は、共観福音書では「小さいものたち」と題されるものである。倉橋が「最も深い意味の籠められている言葉」¹⁹⁾ と称賛し、「子どもをとうとぶ語にして、かくの如く高いものが他にあらうか」、「子どもに対する無関心を責める言葉にして、かく強いものが他にあらうか」と嘆賞していることを顧みれば（217頁）、「小さいものたち」が彼の「子供讃歌」として如何に重要な「聖經の一句」であるかが理解される。

「弟子イエスに來りいひけるは、天国において大いなる者は誰ぞや。イエスおさなごをよび、彼等の中に立ちて曰ひけるは、我まことに爾らに告げん。もし改りて、おさなごの如くならずば、天国に入ることを得じ。然らば凡そこのおさなごの如く自ら謙る者は、これ天国において大いなるものなり」（同頁）

「爾らこの小さきもの一人をも慎みてあなどるなかれ」（同頁）²⁰⁾。

倉橋にとって「おさなごの如くならずば」ないし「おさなごのごとくならざれば」は学生時代からの「聖句」であった（cf. 35頁）²¹⁾。拡大的に捉えれば、倉橋の思想の形成にこれらの言葉が大きな影響を与え、晩年に至るまで変わらなかったことが理解される。「自ら謙る者」を「天国において大いなるもの」としたイエスは、大人が成長のさなかに失ってしまった人間本来のものを、子どもは持ったままであるからこそ、子どもを愛し、尊び、慈しんだ²²⁾。しかして倉橋もまた彼と同じものを目指していた。『子供讃歌』の冒頭には「子どもの長所を賛美する心から子供讃歌が生まれる」（3頁）とあり、しかも「子どもの、もたざるを惜しむのではなく、もてるを愛惜するのである」（4頁）とあるからである。倉橋の言う「子どもの長所」と「もてる」の意味を簡潔に表しているのが、かの「聖書の文」であるに他ならない。イエスにとって、子どもは「いまだ何の事業をもなさず、何の責任をも負わないもの」²³⁾ などでは断じてなかった。むしろイエスは「自ら謙る者」という大人にはない非凡な「長所」を子どもの内に見出し、さらには「天国において大いなるもの」という最大の宗教的価値さえ与えてそれを愛惜したのである²⁴⁾。「子どもほど常に新しく真なるものはない」（125頁）と考える倉橋の目には、愛情豊かに子どもに接するイエスの姿が、「偉大なる『子供讃歌』の歌い手、歌い主」（同頁）に映ったのである。畢竟、倉橋にとって「子どもをとうとぶ」こととは、イエスのように「子どもの、もたざるを惜しむのではなく、もてるを愛惜する」ことに他ならなかった²⁵⁾。

倉橋は「小さきもの一人をつまづかす者は、磨石をその頸に懸けられて、海の深きに沈められん方、なほ益あるべし」という金言を最後に引いている（217頁）。子どもの障害になる者や子どもを顧みない者など溺れ死ぬ、と痛烈に戒めるところにおいて、イエスは子どもに人間としての最高の価値を見出していた。逆を言えば、子どもの価値を損なう者には、最悪の評価を下していたのである。倉橋もまた、或る意味においては、イエスと同じく「海の深きに沈め」の姿勢で子どもの前に臨もうとしていた。倉橋には「フレーベル二十恩物箱を柵から取り出して、第一、第二その他

系列をまぜこぜにして竹籠の中に入れた」(95頁)という経緯がある。しばしばこの話は、当時の形式的なフレーベル主義に対する革新的な批判として紹介されるが、倉橋の根本思想にキリスト教思想があることを顧みれば、本来的には、当時のフレーベル主義が「小さきものの一人をつまづかす」ものだったが故の行動として解釈されるべきだろう。「論理主義や伝統主義のために幼児教育の真が覆われるのを怖れた」(94頁)倉橋にとって、「フレーベリアン・オルソドックス派」(同頁)とは、イエスが厳しく咎めたような、大人の都合で子どもを「つまづかす者」に他ならなかった。翻って考えれば、倉橋が自ら「新保育」と称したものの根本には、「子どもをとうとぶ」ことから最もかけ離れた教育活動への反駁という、「小さきもの」の訓戒に通底する思想があったのである。

IV. 倉橋の「遺跡巡礼」

1. 倉橋のペスタロッチ・フレーベル観

上記の如く、宗教的観点から幼児教育を俯瞰しえるのが、倉橋という教育者である。イエスが心底から子どもを慈しみ、深く祝福したさまを幼児教育におけるひとつの理想として、倉橋は自らもまた子どもの賛美者たろうしていた。倉橋がイエスを崇敬する所以は、彼が世界宗教の宗祖だったからではなく、数多の人道を示した思想家だったからでもなく、純然に「子供讃歌」の卓越した歌い主だったからである。極言すれば、倉橋の幼児教育観ないし児童観において、イエスはそれ以上でもそれ以下でもない。倉橋にとってはそれこそが「子どもの友だち」としてのイエスへの最大の賛辞だったのではないだろうか。

倉橋が生涯を通じて崇敬の念を抱き続けたペスタロッチとフレーベルもまた、既述のように、倉橋にとってはイエスの「子供讃歌」を継承した偉大な幼児教育者たちであった。翻って考えれば、自身の価値観と言動の中心に子どもを据えた思想家であるか否かにおいて、即ち、「子供讃歌」の優れた歌い主であるか否かにおいて、倉橋は兩人に幼児教育者としての非凡性を見出していることになる。さらに言い換えれば、「天国におけるものはかくの如き者なり」において倉橋が最も重視したのは、まさしく「活きたイエスの心」²⁶⁾であり、決して「書き残された章句の講説」²⁷⁾ではなかった。イエスの言説に触れるところにおいて、倉橋は学術的な観点に拘泥しないばかりか、むしろそれを意図的に忌避したとも捉えうる。畢竟、ペスタロッチとフレーベルの思想に対しても同様であると仮定されえるのだが、以下、本章では、イエスの「おさなごを我に來らせよ」という言葉の所有者・実践者としてのペスタロッチとフレーベルを、倉橋がどのような視点ないし価値観から捉えていたかを具体的に探究することで、上記における彼のキリスト教的児童観に対するさらなる理解の深化を図っていくこととする。

1918年に文部省から在学研究員として欧米諸国へ派遣されたとき、倉橋はペスタロッチとフレーベルの遺跡を巡ることで「佇立瞑想してその人のありし日を実感」(114頁)して回ろうと試みた。「古くて新しい教育をペスタロッチとフレーベルに見出す。それもペスタロッチ・セクトリアンやフレーベリアンでなくて、その教育精神に突き入ってである」(同頁)と倉橋は主張する。即ち、セクトでもドグマでもなく、或いは兩名の信奉者が作り上げたものではなく、兩名自身に迫ることによって、兩名の「教育精神」の根本に臨むことを説いている。兩名の思想を探究する際の指針として、「精神はじかに触れることによって、最も力を与えられる」(同頁)と規定した所以は、諸人によって説かれた兩名のセクトの中にもドグマの中にも、兩名の本質は存在しえないことを倉橋はよく知っていたからである。セクトやドグマは、提唱者が体系的に表したものであるが故に、必然的にそれらの大元となるものが存在する。したがって、「その学説や方法論を聴くよりは、その人に会いたい」

というのが、倉橋的な思想研究の方途であり、しかしてまぎれもない倉橋の本音であろう。倉橋は総じて、ペスタロッチやフレーベルが、当時の世論に対して提唱した学説や方法論などの中に、両者の本音を求めてはいなかった。むしろ、優れた学説や方法論を導き出した「その人」が、「ありし日」の営みの最中に、何を見て、何を感じて、何を心に決めたのかを、倉橋は「遺跡を巡礼する」ことによって実感したかったのではないだろうか。言い換えれば、「子どもにまなべよ」と言ったペスタロッチの、「子どもとともにいきんかな」と言ったフレーベルの、まさに「その人」の生き生きとした在り方そのものへの憧憬において、倉橋は「遺跡巡礼」に臨んだのである。

2. 倉橋におけるペスタロッチ解釈の本質

「ペスタロッチ遺跡巡礼」において、自らを「ペスタロッチに酔える人」（20頁）と称する倉橋がとくに紙面を費やして挙げたのは、「ペスタロッチの教育精神の最初の生誕の地」（115頁）とされるノイホフと、倉橋自身が「最もとうとい聖地としてかねて心に深く描いていた」（116頁）というスタンツである。倉橋は前者を「この古くて最も新しい教育者が、子どもの生活に初めて触れた」（115-116頁）ところとして、後者を「日夜の奉仕に精魂をすりへらしたところ」（116頁）として記している。

近代教育史的には、ペスタロッチの教育実践や教育思想について考察する上で、両地における彼の活動は非常に意義深いものである。しかし倉橋は両地に到って「その後のペスタロッチの教育学説をもとより貴重に思うが、ノイホフの悩みと、スタンツの慈愛とにこそこの人のここを敬慕する」（同頁）のみであった。倉橋はペスタロッチの学説にではなく、ペスタロッチの「その人のここ」つまり「教育精神」に、ひいてはペスタロッチという人間そのものに敬意を抱いている。学説にではなく、学説を生み出したその人の胸の内にこそ迫ろうとするのが、倉橋のペスタロッチへの根本姿勢なのである。畢竟、ペスタロッチの子どもへの慈愛にこそ、倉橋は非凡な関心を寄せていたに他ならない。だからこそ、倉橋はスタンツにおいて、次のように自らを「恥じた」としている。

「子どもの生活を慈育するといえば、その身体の保護を専らにして、その精神を護り育てることを忘れ、子どもの精神を教育するといえば、その知能の指導に専らにして、その生活を助け導くことを忘れ、忘れないとしても別個の事業とし、文教とか厚生とかの片手片手に分れて、ほんとうに両手で子どもを抱かない児童愛の分業をペスタロッチの全的児童愛に対して、ひんしゆくせざるを得なかった」（117頁）。

わざわざ「論理的言い方になるのをおそれるが」と断りを入れながら述べていることから明白のように、倉橋が真に感嘆するのは「ペスタロッチの全的児童愛」であり、或いは「子どもらの生活の愛護の中に子どもらの魂の生長を護ろうという志」（同頁）に他ならなかった。倉橋がペスタロッチに心酔する所以は、ペスタロッチの輝かしい数々の学術的な貢献や業績の故にではなく、自らの全身全霊を賭して子どもを愛し、子どもの生を慈しみ続けたペスタロッチの心持ちの故にであった。倉橋はペスタロッチの生き様にこそ心から感服し傾倒していたのである。

倉橋は両地に続いて「直観主義教育理論発展の地」（同頁）であるブルグドルフと、「新教育の世界的名声の地」（同頁）であるイヴェルダンへの訪問についても述べている。しかしここにもペスタロッチのセクトやドグマに関する叙述は全く存在しない。反対に「教育学者としてのペスタロッチの大を考えさせることが多いのであるが、彼が巡礼者として当時をしのんだ生きた追憶はそれで

はなかった」(117-118頁)とさえ論じている。前者の地において倉橋が見ようとしたのは、直観教授という優れた実践教育の理論を提唱するペスタロッチの姿ではなく、「近くの河原で子どもらに小石を拾い数えさせながら自分もいっしょにだまって拾い数えているペスタロッチの横顔」(118頁)だった。また、倉橋が後者の地において思い描いたのは、卓越した教育学者として拍手喝采を受けるペスタロッチの姿ではなく、「古城の室に子どもらにすがりつかれている(イヴェルダンの町の銅像のように)、ペスタロッチの姿」(同頁)であった。さもなければ「ペスタロッチの純情と夢想到に似た理想とに嫁した」(同頁)アンナ夫人の献身であり、愛妻に先立たれたペスタロッチの「切々なる哀痛」(119頁)だった。倉橋は総じて、ペスタロッチのセクトがどのような背景のもとに形成され、展開されたのか、という学術的な目ではペスタロッチの遺跡を見ていなかったと言える。むしろ、倉橋が見ようとしていたのは、遺跡におけるありし日のペスタロッチの「生きた追憶」だった。言うなれば、ペスタロッチ・セクタリアンたちにもはやされ、取り囲まれて覆い隠され、見えにくくなってしまった、ペスタロッチその人の本当の生き生きとした姿を探し出そうとしたのである。即ち、唯一無二の理解者を得て、多くの子どもに取り囲まれて一緒に遊び、小さな子どもからしっかり掴まれるほどに信頼された、「子供讃歌」の歌い手としてのペスタロッチを、倉橋は偲んでいたのである。

3. 倉橋におけるフレーベル解釈の本質

続く「フレーベル遺跡巡礼」において、倉橋が主として挙げるのは、「フレーベルの幼稚園発祥の地」(120頁)であるブランケンブルヒと、「彼のフレーベル巡礼の最大の聖地」(123頁)であるリーベンスタインだった。倉橋は前者での滞在中、フレーベルの生家を訪ねて「幼児フレーベルの性格の内部をこそ、この寂しい村の家に来て、しみじみと見せてもらった」(121頁)と言い、カイルハウに赴いて「フレーベルが峠の上からブランケンブルヒを見おろして、キンダーガルテンの名称を初めて思いつき、声を立てて叫んだ」ように、「キンダーガルテンと高い声を出して興じた」と語っている(122頁)。倉橋はここでもまた、ペスタロッチの遺跡を巡礼したときと同様に、「フレーベルの性格の内部」へと、即ち、フレーベルというひとりの人間そのものの内奥に迫ろうとしていた。

さて、後者の巡礼地について、倉橋は「フレーベルを研究するためよりは、フレーベルの精神にじかに触れることを祈願する巡礼者としては、どの地にましてもとうといのはここでなければならぬ」(123頁)と断言している。リーベンスタインは、フレーベルが最後に移り住み、教育活動を展開し、「幼稚園禁止令」発布の翌年に没した土地である。また、倉橋には「老熟したフレーベルが、村の子どもたちに親しまれたマリエンタールの幼稚園の跡があり、若い女性たちに尊敬せられた保母養成所の跡があり、温泉客らに馬鹿爺さんといわれながら幼児らと没我の遊び相手になった森がある」(同頁)場所である。倉橋は帰国後、当地における「環境の記憶のなまなましい想像のままを、寺内万次郎画伯に詳らかに述べて、フレーベルの真の姿を活写してもらった」(123-124頁)と言うが、彼がここに挙げる「フレーベルの真の姿」とは何だろうか。倉橋はその絵をして「『馬鹿じいさん』の絵」と呼び、「フレーベル記念館から譲られて帰った世に普くあるフレーベルの生真面目な正面像」よりも、「真にフレーベル巡礼者の奉納額といったものである」としている(124頁)。即ち、倉橋はフレーベルをして「馬鹿じいさん」と呼ぶとともに、「馬鹿じいさん」こそが「フレーベルの真の姿」であると言っているのである²⁸⁾。

同様に、倉橋がフレーベルの本質をどのように捉えていたのかを分析するとき、私たちは彼の次の言葉にも注目しなければならない。「東洋の巡礼者は、あなたの教育方法にはいろんな批判を考

えますが、あなたの教育精神には万腔の尊敬と礼賛を捧げるものであります」(同頁)。フレーベルの墓詣におけるこの言葉からも、倉橋がフレーベルの「教育精神」には非常な敬意を抱く一方で、フレーベルの「教育方法」には懐疑的であったことが分かる。倉橋がフレーベルを礼賛する所以は、フレーベルの精神性や人格性にあったからであり、決してそのセクトやドグマにあったからではない。実際に、「案内の馬車屋の少女から聴いたフレーベルへの言葉」である「子どもの友だち(キンダー・フロイント)」をして、倉橋は「破顔して喜んだ」とともに、フレーベルには『キンダー・フロイント』それだけでいい」とさえ断言している(同頁)。即ち、フレーベルの本質は「キンダー・フロイント」であって、世界的な幼児教育者ではないとしたのである。しかして「この少女の言ってくれた言葉のお蔭で、この巡礼記を『子供讃歌』の真の一節とすることができる」(同頁)としているところからも、倉橋がフレーベルの生き様を如何に重視していたかが理解されよう。畢竟、倉橋にとって、「馬鹿じいさん」にして「キンダー・フロイント」であるフレーベルこそが、真のフレーベルの姿なのであり、間違っても世界的な大教育者としてのフレーベルが真ではなかったのである²⁹⁾。

4. 考察

ペスタロッチとフレーベルの遺跡巡礼をして、倉橋は「我々がペスタロッチやフレーベルの教育説を、その名の故によってとうとぶのは、まだ真に至らないためであろう」(124-125頁)と分析している。「名」とは、言うなれば、ブランドである。現代に至るまで、ペスタロッチとフレーベルはともに幼児教育の理論と実践における巨匠であり、両人はその優れた幼児教育思想をして、世界的に最も名の通った大教育者である。しかし倉橋はそんな事実をわざわざ確認するためにそう述べたのではない。倉橋の卓見は、両名が尊ばれる所以を、私たちが「まだ真に至らないため」としているところにある。倉橋にとって、両名の大教育者が尊ばれ、感謝される所以は、「我らが自分で見つけることのできない『子ども』を見つけさせてもらう」(125頁)ところにあった。未だ子どもの何たるかを知りえない私たちが、子どもへとより真に迫るための優れた道具や契機として、もしくは良き事例として、大教育者の教育説は大いに有用であるに過ぎない、というところに倉橋の本意があったのではないだろうか。実際に、倉橋は「大教育者への礼賛はその奥底においては、子どもの礼賛に至り着くものでなくてはなるまい」(同頁)と説くことで、両者の教育学説を礼賛の対象にするのではなく、両者の子どもを礼賛するその教育精神こそを礼賛の対象とし、自分の目の前にいる子どもへの礼賛へと繋げていかなければならないことを主張している。私たちがペスタロッチやフレーベルの学説や方法論を借りるのは、あくまでも「子どもの見方、子どもの感じ方を教えてもらい、助けてもらうだけ(そのだけが大きいが)のことに他ならぬ」(同頁)と倉橋は語る。「ペスタロッチやフレーベルの教育説」は「鈍ったり曇ったりしている我々の目を新たに開かせる」(126頁)ためのものであり、あくまでも「言を借りる」ところのものに過ぎない。「偉大なる『子供讃歌』の歌い手、歌い主」であるところの両名の模倣から始めて、いつか独力で自らの「子供讃歌」を唱えることができるようになろうとするところに、倉橋は「我々がペスタロッチやフレーベルの教育説を、その名の故によってとうとぶ」ことの本当の意義を見出すのである。

倉橋にとって、本来的にペスタロッチとフレーベルの教育は「古くて新しい教育」であり、「古くして新しきもの」を内に含むものである。「古くて」という言葉が端的に過去を意味し、「新しい」という言葉が端的に現在と未来を指しているとするれば、「古くして新しきもの」とは、過去・現在・未来において不変のものであり、畢竟、その超時代性の故に普遍的なものである。倉橋は、両名の

「古くして新しきもの」の「新」をして、「古いままに、いつまでも新しい、久遠の新（エーヴィッヒ・ノイエ）」(110頁)と評した。永遠不滅のものは「真」つまり真理と同義である。「我々がペスタロッチやフレーベルの教育説を、その名の故によってとうとぶのは、まだ真に至らないためであろう」という倉橋の言葉は、翻って考えれば、両名がとある真理に至っているということと、私たちがその真理に未だ至らないために誤って「その名の故によってとうとぶ」ということとの、二重の意味を含んだものとして捉えられる。真に尊ばれるべきは、両名その人であり、両名そのものであるその教育精神であって、学説や方法論というのはそこから産み出された副次的なものに過ぎない。副産物ばかりを学んだところで本質を学んだことにはならない。即ち、ペスタロッチやフレーベルというブランド(=名)を如何に深く尊んだところで、全く意味はないのである。「その芸術家の偉大さによって、美を見せてもらい感じさせてもらう」(125頁)ように、私たちは両名の偉大さにおいて、子どもの何たるかを見せてもらい感じさせてもらう訳だが、結局それは間接的なものである。美にしても、真理にしても、私たちはそれらを「芸術家」ないし「ペスタロッチ」や「フレーベル」という仲介者を通してしか見ておらず、自ら迫ることをしていない。しかし件の大教育者たちは、イエスの「子供をわれに來りしめよ」という言葉に立ち返り、片方は「子どもにまなべよ」と言い、もう片方は「子どもとともにいきんかな」と語り、両名自身がそれを生き生きと実践して体現している。両名の教育学説はあまねく子どもを世界の中心に据えて子どもから学んだが故のものである。しかしてこれらの言葉は両名の「小さいもののうちに、偉大と美を見出して、驚き嘆ずる心」(3頁)としての教育精神において発せられたものである。だが、倉橋が暗喩するように、両名から学ぶばかりで子どもからは学ばず、両名ばかりを尊んで子どもを尊ばないとすれば、私たちは本当に両名から幼児の教育について学んでいると言えるだろうか。倉橋がイエスにあやからんとした所以と、ペスタロッチ・フレーベルを崇敬する所以は、根本的には同一のものである。倉橋が「ペスタロッチ・セクタリアンやフレーベリアンでなくて、その教育精神に突き入って」いったのは、イエスの子どもに対する謙虚さを、両名の生き様から学び取るために他ならなかったからだと言えよう。

V. まとめ

以上の如く、私たちは、倉橋の幼児教育論の根本たるキリスト、ペスタロッチ、フレーベルの児童観について、彼がどのような観点から考察していたのかを探究してきた。しかして倉橋の幼児教育の精神を最も原的に著したもののひとつが、「天国におけるものはかくの如き者なり」に見られるような、彼自身の日々の生活に基づく素朴なキリスト教的児童観であり、かつ「古くして新しきもの」に見られるような、ペスタロッチとフレーベルへの憧憬に基づく彼個人の赤裸々な幼児教育観であることが明らかになった。倉橋にとって、両名の教育精神の本質を端的に表した「子どもにまなべよ」と「子どもとともにいきんかな」という格言こそは、畢竟、それらの根底に存するキリストの「子供をわれに來りしめよ」の精神こそは、彼が受け取った「古くして新しきもの」であり、「古いままに、いつまでも新しい、久遠の新」であり、まぎれもない幼児教育の真理として彼の原思想となったのである。遺跡巡礼の回顧録からも明らかなように、倉橋が両名について語るとき、彼は既にこのことを前提としている。翻って考えれば、自身の価値観と言動の中心に「子供を我に來りしめよ」の精神を据えた思想家であるか否かにおいて、即ち、「子供讃歌」の優れた歌い主であるか否かにおいて、倉橋は幼児教育におけるその人の是非を見ていたことになる。

倉橋は、現今の幼児教育全般における根本考察の不足を憂いたが、無論その中には既成の教育諸

思想に対する根本考察も含まれていた。転じて、倉橋の後継である私たちもまた、彼の幼児教育論ではなく、彼の幼児教育の精神に深く立ち入らなければ、まさにそれこそ「いつまで人の力によるのか」（125頁）と彼に叱られるかも知れない。言い換えれば、倉橋のこのような教育精神を顧みることなくして、彼の幼児教育論の本質へ真に迫ることもまた不可能である。私たちは、セクトやドグマから切り離れたところから倉橋の教育精神を振り返ることなくして、彼の教育思想を基盤とする現代の幼児教育論の核心に臨むことはできない。私たちは、倉橋がそうしたように、彼の教育学説や教育方法ではなく、彼の教育精神に突き入る姿勢を第一に持たなければ、決して「真に至らない」ままとなるだろう。「根本考察が足りない」という倉橋の懸念は、幼児教育者としての資質能力や実践的指導力などの是非にも深く関わる課題として、現代における「古くて新しきもの」である。畢竟、倉橋が指摘したような、幼児教育における根本考察の重要性を再認識し、教育諸思想の原思想を探究するという仕方において、私たちは改めて幼児教育の在り方を考察し直さなければならないのである。

注・引用文献

- 1) 津守真：倉橋惣三と誘導保育論：倉橋惣三の幼児教育論の紹介。『幼児の教育』、第64巻第10号；9頁、1965。
- 2) 倉橋惣三：新しき年を迎えるにあたって。『幼児の教育』、第54巻第1号；2頁、1955。引用文中に「意極」とあるが、実際にこのような言葉を国語辞典で引くことはできない。「新しき年を迎えるにあたって」が活版印刷による刊行物であることを顧みるに、恐らくは「極意」の誤植と思われるが、坂元彦太郎は同部分の引用に際して「究極」と表している（倉橋惣三・その人と思想。倉橋惣三文庫⑩、フレーベル館、東京、193頁、2008）。倉橋研究者の間でも未だ「意」の所在ないし是非は判然としない。したがって本稿では、引用文が「根本考察」に係る叙述であることを鑑み、「極」を「根本」の謂として解釈し、字面に拘泥しないこととする。
- 3) 金子晃之：倉橋惣三の誘導保育論に関する一考察—教育方法論的及び援助技術論的側面を通して—；浦和論叢、第40号、106頁、2009。
- 4) 以降、本稿における『子供讃歌』からの引用・参照については、該当箇所を“[]”で括り、直後の“()”にて頁数を示すこととする。また、本稿では、倉橋における幼児教育は保育の謂でもあり、反対に彼における保育は幼児教育の謂でもあるものとして扱い、相互に置換・補完しえる用語として解釈している。
- 5) これまで、倉橋の幼児教育論とキリスト教的児童観との関連性を具体的に指摘する研究はほとんど見られなかったが、近年では田中直美（ヨハネ・ポスコと倉橋惣三のキリスト教的児童観；星美学園短期大学日伊総合研究所報、第2号、23-60頁、2006）や児玉衣子（改訂 倉橋惣三の保育論。現代図書、神奈川、5-9頁、2008）によって具体的な分析が行われている。しかし何れも主として倉橋の子ども理解に関する比較研究・部分研究にとどまり、彼の「根本考察」の見地から彼の幼児教育論の原思想としてのキリスト教的児童観を規定しているとは言い難く、本稿はこの点において両研究に対して先行的・独自のである。
- 6) 森上史朗ほか：倉橋惣三と現代保育。倉橋惣三文庫⑩、フレーベル館、東京、189頁、2008。
- 7) 森上史朗：子どもに生きた人・倉橋惣三の生涯と仕事（上）—その生涯・思想・児童福祉—。倉橋惣三文庫⑦、フレーベル館、東京、34頁、2008。
- 8) 同上、44頁。森上は、倉橋が学生時代に影響を受けた人物には、キリスト教徒が多くいたことを挙げて、彼の思想形成にキリスト教が大きな影響を与えたことを示唆している（42頁）。
- 9) 同上、54頁。
- 10) 構成的に見れば「子供讃歌の心すくなきを、まことに天下の子どもに対して、はずかしさにたえない。足らざるを嘆ずる心を、天下の子どもに告げて、以て子供讃歌の序とする」（4頁）という『子供讃歌』の序論に対応する内容になっている。
- 11) 倉橋が引用する「聖書の文」は概して「マタイによる福音書」のものである。

- 12) 倉橋の「子どもの祝福」賛美は、キリスト教思想の研究では決して珍しいことではない。例えば、パークレーは「福音書の中で一番美しい物語の一つ」と評している（マタイによる福音書（下）聖書註解シリーズ2、松村あき子訳、ヨルダン社、京都、233頁、1968）。
- 13) 倉橋惣三：育ての心（下）。倉橋惣三文庫④、フレーベル館、東京、192頁、2008。
- 14) 同上、同頁。また、イエスが子どもたちを迎え入れた所以を、パークレーは「イエスは、誰も軽視されなかった。よく『あれは子どもだからほっておけ』という人がいるが、イエスはそんなことはいわれず、誰一人邪魔者扱いにされなかった。イエスはどんなに疲れていても、忙しくても、イエスを求める人にご自身のすべてを与えられた」からだとする（前掲書、234-235頁）。
- 15) 同上、194頁。
- 16) 同上、195-196頁。
- 17) cf. 同上、194頁。
- 18) 同上、194頁。
- 19) 同上、192頁。
- 20) 倉橋はとくに疑いもなく「小さき者」を「子供」と解釈している。ルツ（EKK 新約聖書註解 I /3 マタイによる福音書、小河陽訳、教文館、東京、2004）は、両者を同一に捉えることは「言葉の上では全く可能である」（36頁）としつつ、この章句が、聖書解釈史的には「解釈者が子供について抱いている表象によって解釈がどれほど簡単に決定されてしまうか」ということを示すものでもあり、転じて、「解釈者が自分と子供の関係からただ喜んでその空白を埋める空っぽの箇所と見なされる」ことを喚起している（30頁）。畢竟、ルツの指摘に則るならば、倉橋の「天国におけるものはかくの如きものなり」における「子供」解釈もまた彼自身が「子供について抱いている表象」、即ち、彼自身の主観に過ぎないことになる。この点において、倉橋の聖書解釈は既存の聖書解釈学とは相容れないものであるが、彼はもとよりドグマティックにこの章句を解釈しようとはしていない。倉橋のフューゲル（おきなごを我に來らせよ）解釈において、イエスは「子どもずきのイエス」（前掲書、193頁）や「やさしい叔父さん」（前掲書、194頁）にまで還元され、誰にとっても身近で日常的な存在として捉えられている。したがって、倉橋に則るならば、ルツを初めとする「学者連」（191頁）はイエスと「子供」の関係を大人本位に解釈しており、肝心の「子供」を中心にイエスの言説を振り返ることを知らないことになる。倉橋はこのような非学術的、非大人的、非クリスチャン的な観点から、イエスの言葉を理解しようとしたのである。
- 21) 学生時代の倉橋の師であった内村鑑三の影響も考察される。内村もまた「小さいものたち」を「イエスが小児のことについていわれし言葉はいくつもありますが、これはその中でもっとも美しい、また意味のもっとも深いものであると思います」（山本泰次郎編：内村鑑三聖書註解全集、第8巻、教文館、東京、286頁、2005）と称賛している。
- 22) パークレーによれば、子どもには「天国の民の三つの偉大な特徴」として「子どもの謙遜」、「子どもの依頼心」、「子どもの信頼」があり、イエスは子どもが持つこれらを「他人に接する手本」や「神に対する模範的な姿勢」として弟子たちに示したとされる（前掲書、196-197頁）。しかしパークレーもまた、内村や倉橋同様、「小さいものたち」を「偉大な真理をあらわしている」（同上、194頁）と高く評価している。
- 23) 内村、前掲書、287頁。
- 24) cf. パークレー、前掲書、235頁。「イエスは、子供たちは誰よりも神に近いといわれた。子供たちの素直さは何よりも神に近い。人は、成長するにつれて、神に近づく代わりに神から遠ざかっていく傾向があるのは誠に悲しいことである」。また、ルツは、聖書解釈史におけるこの章句が「訓戒的解釈、すなわち子供のように、つまりは単純で、慎み深く、謙虚で、貞潔で、外面的なもので評価しない等々になるようにとの、成人者への呼びかけ」として重要な位置を占めてきたことを指摘している（前掲書、145頁）。
- 25) 倉橋が「子供讃歌」の本質を「いと深きところの嘆美であり、詠嘆である」（3頁）とし、「弱さをあわれむ心から発する」ところの「教育の心」と明確に区別した（同頁）のもそれ故だと推察される。
- 26) 倉橋（注12）、191頁。
- 27) 同上、同頁。
- 28) 「馬鹿じいさん」としてのフレーベルを高く評価する例は必ずしも倉橋に限らない。近年では、本田みどり

が「失意の日々にあっても、子どもたちと無心に遊ぶフレーベルの姿があったと伝えられている。その姿は、世に認められぬ深い悲しみをかかえつつも、人間の教育に一縷の希望をつなごうとする気高い人間のそれであったのではなかろうか」と分析し、「馬鹿じいさん」ないし「キンダー・フロイント」こそがフレーベルにおける教育の精神と活動の本質であるとする見解を示している（『諸外国の教育思想』、矢藤誠慈郎・北野幸子編：教育原理。基本保育シリーズ②第5講，中央法規，東京，55頁，2016）。

- 29) しばしば「日本のフレーベル」と紹介される倉橋だが、もしも彼のフレーベル観に従うならば、そのフレーベルは“大教育者”としてのフレーベルではなく、「馬鹿じいさん」や「キンダー・フロイント」としてのフレーベルでなければならない。したがって、倉橋を「日本のフレーベル」と呼ぼうとするならば、私たちは「日本の“馬鹿じいさん”」や「日本の“キンダー・フロイント”」という意味で呼ばなければならないのであり、間違っても「日本の大教育学者」という意味で言うてはいけないことになる。

